

第一話 馬毛島での御前試合 ～ 種子島の刀鍛冶「石見と大学」～

鉄砲伝来の頃、種子島には三人の名刀鍛冶がいた。

- 1 八板金兵衛・清定は鉄砲伝来時、刀鍛冶を集めて、伝来銃国産化に努めた人物
- 2 平瀬国清・石見は永禄年間、禰寝軍が口永良部島を攻めた時、島民と防戦し、活躍した人物
- 3 牧瀬慶清・大学 薩摩谷山の刀鍛冶で、種子島入島の時期定かでないが、時堯に仕えた。

この話は鉄砲伝来の一寸前、「石見」と「大学」の面白い秘話である。

石見の刀はほっそりして美しく、大学の刀は分厚くずっしりしている。

島の噂は「石見の刀が一番？それとも大学？」と分かれていた。

島主・時堯は、「馬毛島で鹿を斬らせて、御前試合をする」と意気込んだ。

御前試合の様子は詳しく書かれていないが、恐らく、時堯は勇壮な鹿狩り

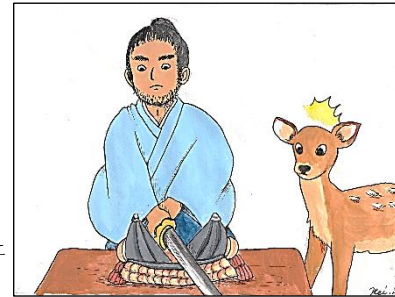
を馬毛島の岳の越の頂上から見学したに違いない。試合会場には、三ツ鱗

の家紋の入った陣幕が張り巡らされ、大勢の島民が見守る喧噪の中で行われた。

牧瀬家（後に石原姓）系図にはその様子が書かれている。「公、馬毛島で斬鹿させ、その切れ味を競わせた。結果、石見の刀は鋭く、大学の刀は鈍也」。すると大学は「我の刀は兜割用だ」と言って、再び、殿

の前で鉄板を両断して見せ、「まさしく兜割りの名刀」と時堯に褒められた。種子島には切れ味鋭い刀鍛冶

「平瀬石見」と、兜をも切れる刀鍛冶「牧瀬大学」がいたという牧瀬家系図が伝える楽しい歴史秘話である。



第二話 摂州侍の種子島滞在中の秘話 ～渡邊頼重とその子頼安～

渡邊氏の第25代頼重は代々摂州（大阪）の侍であった。何故か？

天文16年（1547）種子島へ下り、3年間滞在中、石堂氏の女と結婚し、妻は子を宿す中で、天文19年（1550）

頼重は故郷（大阪）へ帰国した。別れるにあたり、妻に「もし、お腹の子

が男子だったら、父の形見として“家宝の脇差”を証として置いていく。

子供が成長したら渡してくれ、頼むぞ」と言い残し、帰国した。

父頼重が帰ると間もなく頼安は誕生した。母は十八歳の立派な青年侍に

成長させた。

永禄10年（1567）夏、頼安は「脇差（小刀）」を抱いて、摂州住吉へ馳せ参じ、初めて父頼重に

初見し、親子の証である脇差を捧げた。父頼重は種子島の妻に18年前に預けた刀を見つめ、「うむ、頼重、

まさしくわが子だ」と抱きしめた。頼安は三年間父宅に滞在し、渡辺家系図を書写し、元亀元年（1570）

夏、種子島へ帰った。帰島後、島主時堯公に新恩地（土地）をいただき、種子島家の家臣となっ

た。慶長十五年（1610）三月死去 六十一歳 本城「勘当坂」渡辺家に伝わる秘話で

ある。（了）



令和4年9月26日発行 第10号 [発行] 西之表市 [編集] 企画課 歴史文化活用係 〒891-3193 西之表市西之表 7612 番地 電話 0997-22-1111 (内 280) FAX 0997-22-0295



西之表市史編さんだより

先史部会

お焦げから年代がわかる！

立神 倫史（鹿児島県立古仁屋高等学校）

文字の無かった旧石器時代や縄文時代などの先史時代を対象とした研究に、近年では自然科学的な手法を積極的に取り入れるようになってきました。その1つが炭素14年代測定法です。遺跡から出土した土器には、煮炊きに用いた際に生じたお焦げなどの炭が付いていることがあります。この炭の中には、炭素14とよばれる元素が含まれています。動植物の体内にある炭素14の濃度は、死後に一定の比率で減少していくという性質があります。炭素14年代測定法では、この性質を利用し、今から何年前のものであったかが分かります。

これまでの研究では、約1万年前に氷河期が終わり、その後、温暖化に伴い森林が形成され、木の実などを煮炊きするために土器が発明されたと考えられてきました。しかし、奥ノ仁田遺跡や鬼ヶ野遺跡などの種子島から出土した土器も含め、日本列島で土器が登場した頃の土器に付着した炭を年代測定した結果、土器の登場が定説よりも約4,000～5,000年ほど古くなることわかってきました。今回の市史編さん事業に際して、写真の土器に付着した炭の年代を測定したところ、今から約4,500年前のものとなりました。このように、年代が具体的に明らかになることにより、環境史などの他分野での研究成果とも比較し、当時の様子をより豊かに復元することができるようになりました。



年代測定した縄文土器

自然部会

方言「ながらめ」はトコブシのこと？

尾形 之善（種子島開発総合センター）

種子島で「ながらめ」と言えばトコブシのことと思われるでしょうが、じつは「ながらめ」には2種類あって、トコブシのほかにフクトコブシがあります。私たちが普段「ながらめ」と称しているものは、この2種類の総称なのです。この2種類の貝の大きな違いは、殻の表面に螺肋（らろく）という筋が強く出るか、出ないかです。螺肋の強く出るものがフクトコブシ、出ないものがトコブシです。ただし、どちらに属するか判断に迷う中間型もあります。昔はトコブシも少しは見られましたが、稚貝の放流が盛んになったせいか、現在はほとんどがフクトコブシです。この現状を踏まえれば「ながらめ」はトコブシというよりフクトコブシという方がふさわしいかもしれません。昭和41年（1966）頃から約10年かけて西之表新港の造成整備がなされましたが、その間海底をしゅんせつした埋め立て地で、池村静哉氏によって採集されたとされる貝の中にトコブシと同じミミガイ科の貝が大小2種交じっていました。日本産の貝類図鑑には載っておらず種名が分かりませんでした。貝類研究者の黒住耐二氏にお尋ねしたところ、いずれも外国産の貝で、大きいものが食用のアカアワビ、小さいものは養殖に使われるインドネシアあたりの貝だろろうとのことでした。果たして種子島で養殖実験用として導入されたことでもあるのでしょうか。ちなみに、「ながらめ」に似た貝でおなじみの「あなご」は和名が「イボアナゴ」だったのですが、最新の図鑑では「イボアナゴウ」と改名されています。



トコブシ



フクトコブシ

近現代部会

夜空の星がささやく、種子島の歴史

森 友和 (近代史担当)

歴史の史料の真贋を判定する一つとして、日月蝕・掩蔽・惑星集合等の記録を、天文シミュレーションソフトで過去の天文現象を再現検証する方法があります。

日本書紀に、「天武天皇十年八月二十日、多禰島に遣わした使者らが、多禰島の地図を奉った」、その後「九月十七日、火星が月と重なった。冬十月一日、日食があった。」と記録があります。この天文現象を西暦で再現すると、今の奈良地方で681年11月3日夜に火星食が起こり、11月16日朝9時から部分日食が観測可能ということが分かります。このことから、上記種子島に関わる記録も確からしいと信じる事が出来ます。

西之表市年表に、「明治元年正月七日 西空に彗星あらわる」と書かれています。これは、「種子島家譜」に「星孛于西方」と記録されていることを記したものです。しかし、明治元年(1868)1月には、西之表以外の世界で彗星を観測したという記録は確認できません。明治元年正月七日は、西暦では1868年1月31日です。この夕空の天文現象を再現すると、馬毛島の上空に金星(方位 61.526° 高度 22.059°)が-4等星で輝き、木星(方位 62.000° 高度 21.851°)が-2.1等星で輝いていたのが分かります。つまり、明るく輝き重なるように並んだ惑星を彗星と見誤ったか、「孛」を輝き集まると記録したものではないでしょうか。

種子島が太平洋戦争の空襲で戦場となる前、花里浜から長浜の広い一帯に兵隊の溺死体が流れ着いた事件がありました。北西風で打ち寄せる数百の兵士の死体を、女子学生も夜半に招集され、引き上げ作業を行いました。ところが、人々の脳裏に鮮明に残っているこの事件は、起こったとされる年月日が幾つも異なって記録されています。しかし、ある体験記には「沖合を半月の光をすかして見ると、黒い玉が点々と浮かんで浜に打ち寄せる」との記事があります。この夜空に浮かぶ「半月」という星のささやきから、今後事件の年月日の判明に迫っていけると思っています。

校区史部会

聞き取り調査まとめ～榕城校区の古石塔紹介～

1. 中西 塩祀りの石塔 (話者：吉留義喜氏 聞き取り：尾形公雄)

中西公民館の敷地に塩祀りの石塔が建っている。大昔から、毎年1月の町祈祷に併せて本源寺の僧を招き、中西(長小田、北平)住民の参加により塩祀りを行っている。製塩とは関係なく、安産の神を祀ったもので、文字は彫られていない。従来、古城ヶ原の丘の上にあったが、雑木の繁茂、参加者の高齢化等で現地での祭事が困難となり、近年現在地へ移設した。



2. 天神町 馬頭観音 (話者：角地司氏 聞き取り：荒河翼)



菅原神社社務所裏に建てられた1基の石塔。昭和42～43年頃、天神町の南日本新聞西之表販売所周辺に倒れて放置されていたものを、角地氏が青年仲間4人で担いで現在地に運び、建て直した。角地氏は昔、馬頭観音様だと聞いた。石塔には、全ての生き物の霊を供養するため、お経三千部を唱えたということが刻まれている。元禄6年(1693)と彫られており、300年以上前の古い石塔である。

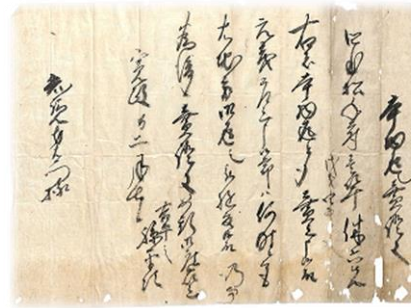
資料・写真のご提供ありがとうございました!

まだまだ募集しています!ご連絡ください!



種子島家史料

種子島時茂さん(鹿児島市在住)から、種子島家に伝わる古文書134点、古写真のアルバム12冊をご提供いただきました。左は、江戸時代に種子島家が鎗の師範からもらった免状の一部。



榎本家史料

現和上之町の榎本千明さんから、古文書118点、硯石などをご提供いただきました。江戸時代に庄屋を務めていたようで、現和の歴史を紐解くカギとなりそうです。



山口家史料

安納軍場の山口優さんから、支那事変関連史料9点をご提供いただきました。

中原康信氏写真

下西川迎の中原さんから、下西校区のイベント写真をご提供いただきました。右は2007年の城ノ浜夏祭り。



市史編さん事業の経過(7月以降)

- 7月3日 浜脇の牧祈祷取材
 - 13日 鹿児島正建寺訪問
 - 21日 西俣大聖寺跡地調査
 - 22日 立山の田の神山調査
 - 26日 校区史部会
 - 8月16～17日 先史部会古石塔調査
 - 21日 浜脇の施餓鬼取材
 - 25日 中世部会史跡調査
 - 30～9月1日 中世部会城址調査
 - 9月4～5日 中世部会史跡・史料調査
 - 8日 自然部会海岸植物調査
 - 15日 安納本蓮寺調査
 - 22～24日 自然部会ほ乳類調査
 - 26日 先史部会
- 編さんだより第10号発行

大聖寺跡の石塔群

大聖寺は、現和西俣に江戸時代まであったお寺で、現在跡地は竹藪となっています。校区史現和担当の石園一郎さん、西俣集落の吉田雄二さんの案内で竹藪に分け入ったところ、五輪塔4基、自然石の石塔6基を確認することができました。



浜脇の施餓鬼

8月21日(日)、伊関浜脇集落の正立寺で施餓鬼が行われました。施餓鬼は、生き物の霊を供養する仏教行事です。参加者は、本源寺の土屋住職にお経を上げていただいたあと、縁側に作られた水棚に煮しめやお洗米を供えていました。

